

仏教と教育

四 弘誓と教育精神

仏教と教育

仏教の所説は広い。しかし所説の全ては人間及び社会成就の普遍的妥当な道を説かれたのにすぎない。大乘という言葉は、普通に、大いなる乗物、即ち一切衆生の全てを乗せて現実の彼岸より理想の彼岸へと度する乗物というように、『法』の量的解釈に用いられる。しかし翻つて考えれば、仏教が徹頭徹尾人間の究竟的自覚を説けるものである限り、大乘とは地上の何れの時代、何れの人と雖も、これを実践せずば人間生活は成就し得ないという、普遍妥当な法、或は道そのものなることを知ることが出来る。かかる見解に立つ限り、大乘の法とは自覚の本質であり、人間生活の基調である。随つて大乘菩薩道は、教育壇上の人にとっては、特に研究され実践さるべき道でなくてはならない。

日本に於ける教育的諸科学は、概ね西洋より翻訳されたものであり、或はそれが日本化されたものである。而してかかる教育的論理の究明はすでに到れりつくせりの感があるにかかわらず、何故更に仏教的立場より教育を再認識せんとするのであるか。我等は次の如き諸点について考えることが出来る。

一、東洋には東洋独特の文化がある。而して仏教はその最たるものである。

一、大和民族史における民族教化の上に仏教の与えた貢献の再吟味。

一、西洋の学問の特徴が分析的であり、抽象的であるに對して、東洋、特に仏教の1行方は、全体を全体として直感しつかみ、体験しようとする。従つて全人的であり、生命的である。

一、明治已来、東洋を忘れ、宗教を無視し、科学を偏重して、頭腦過大の人を造り、情意の教育、特に宗教心の發達を碍毒したことの反省。

一、報恩感謝犠牲奉公の精神を忘れたため、個人主義的、利己主義的な人間を造つたこと。

一、然るに漸く過去の教育の欠陥が明らかになり、人間の成就、情意の陶冶、やがて宗教的情操の尊重が叫ばれ、特に「教育は遂に人である。」教育者そのものを得なければ、真の教育は不可能である、との自覚が明らかになった。ここにおいて教育の真精神、及び、教育者そのものの本質的教養が根本問題となる。宗教が、他の如何なる諸文化と雖も果すことの出来ない人間成就のための唯一絶対な根本的な「聖」の要求に關するものである限り、教育者にとつては、宗教は他のいづれの人よりも重要視されるべきである。而して、かかる見地において、智、情、意のいづれより研究するも、完全なる要素を具有するものは仏教である。ここにおいて、教育の再批判の立場を仏教に求め、教育の真精神を把握し、これを教育壇上に獲得せんとするものである。

弘誓願

仏教はこれを色々な思想をもつて代表せしむることが出来るが、我等は先ずその最も一般的なものをかりて、仏教と教育との内的交渉を求めんとして、先ず四弘誓願を出発点とした。

四弘誓願は全ての菩薩の総願である。総願とは、一切菩薩が初めて発心して道を成就せんとするに当つて、必ず発さねばならぬ願という意である。即ち菩薩道の根本基調となるものである。一切人類にしていやしくも自利々他成就して菩薩道に生きんとする限り、何人も必ず発すべき願という意である。弘誓願とは、弘はその所願広普なるが故に弘といい、誓とは、その心意を制するが故に誓と言ひ、願とは、満足を志求するが故に願というのである。されば弘誓願は小我小欲を否定して生れるが故に廣大普徧であり（弘）、随つて願は小我の利己心を制し否定して（誓）、大我の理想を實現せんとする意欲であることを知ることが出来る。

すでに「願」はそれ自体廣大普徧を本質とする。これを古今に通じて謬らず、これを中外にほどこして悖らざる真理に根ざさねばならない。真の教育的情熱は唯かかる広普なる法の体験よりのみ生れる。私利私欲が根底である限り、真の教育的情熱はあり得ない。候令教壇上に於て接する児童は、五十名内外の少数であろうとも、ここに動く願の内容は、これを一切衆生に及ぼして猶足らぬ底の真理でなくてはならない。菩薩は一切衆生に施すべきを一切衆生に施すのである。願の内容がかかる廣大普徧なるが故に、その所願の態度においても、一切衆生を大慈悲する底の深さを持つのである。而してかかる弘誓願に生きる者は、必ず本能我のいうがままに求むるがままに、自己を放逸ならしめずして、必ず自らの心意を制するが故に『誓』というのである。即ち本能我に立場あらしめずして、願を王座に即かしめて、本能我即ち煩惱をして従属せしめ、統一づけしめるのである。

誠に仏心は『誓』に生きる。誓があつてのみ願は願たり得るのである。されば仏教にあつては「弘誓」と綴つて「願」の内容とする。弘と誓とあつてのみ願は成立するのである。この弘誓願なくしては教育作業は、畢竟、教師のパンを得る一手段たるに終る。

四弘誓願

言う所の四弘誓願とは、

衆生無辺誓願度 煩惱無尽誓願断 法門無尽誓願学 仏道無上誓願成
のそれである。『心地観経七』に曰く

「一切菩薩復有四種 成就有情 住持三宝 大海劫終不退転 云何為四。
一者誓度一切衆生 二者誓断一切煩惱 三者誓学一切法門 四者誓證一切仏果」と。

衆生無辺誓願度とは、菩薩の無辺なる一切衆生を濟度せんとの誓願である。即ち菩薩の利他の願心を現わせるものである。菩薩魂とは全く全我を奉げて衆生を救わんとする利他魂に外ならない。憶うに、吾人の生活にして肯定せられんには、唯その生活があげて利他の大行たる場合においてのみである。真理を代表して壇上に立つ教師たるものは、全くこの菩薩の化他の大行に則るべきである。しかしながら、真の利

他行は決して真の自利をぬきにして成就されるものではない。真の自利をぬきにしたる利他は小乗の独覚であつて、大乘の菩薩道ではあり得ない。ここにおいて真実の自利の道が説かれる。即ち、煩惱無尽誓願断 法門無尽誓願学 仏道無上誓願成 以上の三願は全て菩薩自利の内容を示されたものである。

煩惱無数誓願断……：煩惱の数限りなきを誓つて断ぜん、との願に生きることである。煩惱とは本能我のことであり、小我の要求であり、悩み苦みの根本原因である。この本能我の要求によつて、人生五十年を空費する者、即ち凡夫である。然るに菩薩は、この煩惱の無数なるを断ぜんとするのである。

煩惱とは価値我に対する反価値である。自己を苦しめ、他を悩ます暗の根本である。もしこの煩惱の声のみにて動かんか、真実生活は根本よりくつがえされて、人生は無価値なる流転の巷となる。されば菩薩は畢生の力をこめてこの本能我と戦つて勝とうとする。反価値の本能我の覆滅する所、真我、大我、価値我は人格の王座に君臨して、無上道を成就することが出来るからである。我等は先ず、何人にも具足する煩惱に対する断の誓願より行歩しなければならぬ。（第十六巻第九号）

菩薩精神

菩薩、それは神仙でもなく、鬼神でもなく、実に人間である。人間必ずしも菩薩ではない。しかし菩薩は必ず人間である。そこに仏教の特色がある。而して人間が菩薩たることは、何人と雖も拒まれてはいない。故に、如何なる人も必ず菩薩たらねばならない。然れば如何にして人は菩薩たり得るのであるか。曰く弘誓願に生きるこゝとである。

衆生無辺誓願度……：菩薩は一切衆生を度せんとする誓願に生きる。成就衆生ということとは、菩薩の生きる根本的態度でなくてはならぬ。その全我を布施して生きる利他の生活、そのみが菩薩行として肯定せられる。九月二十一日の近畿地方の風水害に当つては、教育者は、その崇高なる教育精神を發揮して、幾多の美談を残した。誠に教育はいよいよ人であること、人を得てはじめて成就することを如実に物語つた。平素の精神的動向が、児童の為に、献身的であり、殉教的である時のみ、いざという時、その平素の歩みに光るものを發揮するのである。

教育者にしてもし教育的情熱を欠がんか、如何なる施設も、研究も死灰物となしてしまふ。而して真の教育的情熱は、一片の感情ではなくて、菩薩の利他魂の自然の発露でなくては生れない。古来の聖賢は、教育学を学ばず、教師資格を持たずして、皆よき教師であつた。西洋のさる哲人は積尊を以つて世界最高の人類の教師であつたと言つた。無我の大精神が動いてのみ、熾烈なる教育的思慕を生むのである。教育者の言動の全ては、直ちに児童に印象されて、その長き未来を支配すると思えば、教育者は一切衆生を無限に濟度せんとする菩薩行に則るべきである。

煩惱無数誓願断

しかしながら、真実の利他は必ず真実の自利から生れる。自利なくしては利他はあり得ない。自利々他一如の境こそ、真の道である。もし自損損他の世界に墮すれば、

そこには人生生活は根本からくつがえされる。特に教育者にして自損々他すれば、教育作業は教育作業でなくて、殺人作業となる。故に自利の世界が成就されなくてはならない。

煩惱無数誓願断……それは自利行の第一である。煩惱のことを、普通、罪悪の名で呼ばれる。世間にいわゆる、犯罪、又は道徳的悪よりもより深刻なる内省自證において信知し得る、本能我の全てであり、精神的動きの全てである。仏は、凡夫迷妄の心を、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒煩惱の動きであると教える。人間が何等の教育を受けず、受けたとしても、それが人格の本質にふれず、宗教的体験にまでおし進められない限り、その生活の中心は必ず欲におかれる。最近社会のやゝ上層に位する人々が様々な犯罪を構成して、その醜態を曝露するもの、教育を受けたる支配階級に属する人々が多い。これ宗教的教養を欠除せることも確にその一因でなければならぬ。特に教育界において疑獄事件のおこるは、教育の理想よりも、自己の名利心を満さんとする処におきたもので、教育史上の汚点である。かかる形にあらわれた犯罪は言うを待たず、その心的生活の中心が「欲」中心である場合においては、遂に真実の教育は成就しないのであろう。

されば菩薩は、智慧光の力によつて貪欲を否定して、その否定の境において現われる願に生きる。

すでに前号において述べたように、弘誓願とは、弘とは『広普』を意味する。即ち広大普徧、普徧妥当なることである。普徧とは、仏教においては、時と処とを超えて、しかも、何時でも何処でも万有に実在する真如を意味する。この真如は又涅槃ともよばれるが、涅槃の真実在に根拠を持たざる限り、普徧の道はあり得ない。これ煩惱を否定する智慧光は涅槃より流れ出づる光であり、涅槃を自證せしむる眼である。

誓とは、その心意を制するが故に誓というのであつた。意馬心猿のおどり狂うままに生きる所に願はあり得ない。本能我が、智慧光に照破されて、その心意の奔放を制する処に道がある。しかもそれが実在に根拠を持つ限り、欲を超えて願の生活こそ、易行道である。

否定

実在真如より顕現して、衆生の上に来生し、その自覚を通して貪欲を否定する力を、親鸞聖人の言葉を借りて言えば、如来の本願力である。如来の本願力は、浄土より人生に、仏より衆生にはたらきかけて、衆生の迷妄を限りなく全否定し、その全否定を通して如来の真実を全肯定し、我及び人生の内容とならうとする。

ここにおいて否定と言う語であるが、否定とは、消滅ではなく、修繕でなく、廃除でなく、仏心と煩惱との全き揚棄である。であるから「煩惱や欲を否定せよ」と言つても、なくすることではない。炭に火のおこりついたが如く、仏心によつて本能我を揚棄することである。冬は何人といえども寒い。夏は何人といえども暑い。しかし真に教育のことに献身的時間である時、その寒暑を超えて何ものかゝ動き、『断』の一字が光つて寒さの中に勝たせるであらう。

智慧光が、本能我より高次の立場に立つて、全き統丁と支配をなすであろう。（第六巻第十号）

法門無尽誓願学

真に利他せんとする者は、必ず自利を真に成就しなければならぬ。而してその自利の第一、前号においては「煩惱無数誓願断」について述べて来た。誠に煩惱に無自覚にして放逸無漸であることは、それ自体自損するものであつて、何で利他を成就することを得ようや。故に願には必ず、煩惱を否定するの智を生じ、欲を制するの誓をおこし、生活そのものの聖化を成就するのである。

然るにかかる弘誓は更に「法門無尽誓願学」と転じて、はじめて成就せられるのである。即ち仏法の法門は無尽である。その無尽なる法門を学ばんとするもの即ち仏教者である。積尊の説きたまふ法門は八万四千と言われる。その法門を学ばんとするもの即ち仏教者である。

蓋し仏道を精進せんとする者は必ず三宝に帰依する。三宝とは仏、法、僧の三宝である。この三宝に対する絶対帰依こそ、具体的な宗教生活そのものである。僧に帰依する所以は、僧によつて法を学ばんがためである。法は、聖者より聖者、高僧より高僧へと伝持せられる。その僧を善知識と仰ぎ、それに絶対帰依して、ひたすらにその説ける法を聞くことによつて、やがて自己も仏たらんとするのである。

普賢の行願

憶うに法を学ぶことなくしては、永久に無智に沈んで、自利利他成就することは不可能である。されば一切衆生を救わんとする誓願に生きる菩薩は、常に限りなく向上門をたどつて、法を求めて精進するのである。魂の糧は唯、法を食とすることにある。誠に法こそは、三世諸仏菩薩を成就する普偏の大生命である。真理は天地を一貫する真如の内容である。如来の内臓である。独断偏見を超えて真理と自己とを等しうすることより外に自らを救う方法はあり得ない。されば、四十華嚴経の普賢の行願品にも、真如界より現実生死界に還来して、無辺の衆生を成就せんとする普賢の行願として十大願を教える中に、その第八に「常随仏学」を挙げられている。普賢菩薩とは、釈尊の慈悲を表わせるものである。慈悲心は常に衆生に同化随順しつつ、懺悔業障、随喜功德等の諸徳を成就しつつ、諸仏如来を敬礼称讃して、仏の住世にあつて、常に仏に随つて法を学ばんとするのである。

求道

教育者は、普賢の如く、真理を代表して被教育者に向わんとするものではある。しかし、もし教育者にして、単に教えることのみで没頭して、学ぶことを忘れんか、教ゆることも亦不可能であろう。真に教える者は、真に学ぶものでなくてはならない。教えることを知つて学ぶことを知らぬ人は、すでに生命の枯死せる人である。されば、教育者は、教育者であるより先に、被教育者以上の被教育者でなくてはならない。而して被教育的体験は、必ずその前に真理を代表する師を求める。純なる学ばんとす

る心は、必ず師教の前に合掌してその教えに随順する。されば常随仏学と言ひ、帰依僧と言われるのである。

教育者にして、教育によつて衣食住をきゝえられることは決して恥辱ではない。しかし衣食住を本位として教育の根本使命を忘れて、月給、恩給を数えることが唯一の衷心の声であるに至れば、すでに真の教育者ではない。かかる教育者は何時しか教育者としての光輝を失うであろう。永久に若々しくある唯一の方法は、不斷に永久に純なる求め心を失わぬことである。而して真実の宗教生活とは「法門無尽誓願学」と菩薩精神に生きる具体的な生活に生きることである。

大無量寿経において法蔵菩薩は、師仏世自在王如来の前に合掌して、その一切衆生救済の誓願を宣べるに当つて、

仮使有仏 有千億万 仮使仏有りて百千億万

無量大聖 数如恒沙 無量の大聖数恒沙の如くならんに

供養一切 斯等諸仏 一切これらの諸仏を供養せんより

不如求道 堅正不卻 しかず、道を求めて堅正にして卻かざらんには。

と説かれ、無量清浄平等覚経には、

設令満世界火 設令世界に満てらん火をも

過此中得聞法 此中を過ぎて法を聞くことを得ば

會丙作世尊將 會ずまさに世尊と作つて將て

度一切生老死 一切の生老死を度せんとすべし。

と宣べられる所以である。即ち道を求める心は法を聞く心である。この法を求め、6道をきわめて自己を成就せんとするは、全く菩薩の誓願と言わなければならぬ。

仏道無上誓願成

かく菩薩は、誓つて一切の煩惱を断ぜんとし、誓つて一切の法門を学ばんとするは何のためであるか。それが第四の「仏道無上誓願成」のためである。即ち一切の仏果を證し、無上の誓願を成就せんとするのである。

蓋し仏教の法門は無尽であるが、その目的とする所は、畢竟、仏果を成就せんとするにあるのである。仏果を證するとは、涅槃に至ることである。涅槃とは実に菩薩の理想である。而して涅槃に至つて一切の徳を成就し、仏陀世尊となり、一切群生を救わんとする「衆生無辺誓願度」の第一の弘誓を完全に成就すべき身となるのである。

成仏

成仏………：仏陀とは何であるか。仏陀とは、最高理念の実現せられたる絶対人格である。涅槃の絶対価値を実現したる絶対人格である。即ち、煩惱無數誓願断、法門無尽誓願学によつて仏道無上誓願成を完全に果した人である。仏陀は、その主観界に自覚を成就するのみならず、客観界に覚他を成就せるものである。覚他とは、衆生無辺誓願度の成就である。語をかえて言えば、自覚と覚他を成就せる人である。古来これを、自覚、覚他、覚行窮満と言われる。而して、自覚とは法を得証することであり、覚他とは一切衆生を利益することである。

法身

仏陀は法を得証せる人である。而して法、即ち、真理は決して単に真理として抽象的にぶらさがった死灰物ではなくて、どこまでも具体全一の生命である。即ち生きた人格的実在であり、必ず生きた人格の上に顕現するが故に、真理、即ち、法を法身とよばれる。

この聖なる法身を体現することによって仏陀は誕生するのである。この法身が、仏陀の人格となり、実行となり、説法となって顕現するのである。さればこの不生不滅の法身、即ち、人格の本質であるが故に、仏陀も亦不生不滅にして金剛不壊だということである。

この成仏を消極的に表現すれば苦悩罪惡の滅尽であり、差別的繫縛の断滅であるが故に、四弘誓においては煩惱無数誓願断と挙げられるのである。

而してかかる差別的見解の打破、苦悩罪惡の滅尽は、法身自体より等流する智慧光によつて可能なのである。仏陀はこの智慧光によつて、善惡、賢愚、美醜、淨穢等の相對差別の囚れを超えて、一切衆生平等の大慈悲を成就するのである。この大慈悲こそ、仏陀の全人格である。

仏教の通規として、釈尊より外の者は仏陀とは言わない。それは、仏教徒の謙讓の徳であり、又その内省自証に忠実なるが故である。然れば、真に仏陀の教えを生きる者をば何と呼ぶのであるか。菩提薩埵 (Bodhisattva) がそれである。これを旧には、大道心衆生又は道衆生と訳し、新には大覺有情、又は覺有情と訳す。道を求める大心7の人であるから道心衆生と言われ、仏の大覺を求める者なるが故に道衆生とよばれ、大覺有情又は覺有情と言われるのである。菩提とは道であり覚りである。薩埵とは衆生であり人である。しかし薩埵は唯単に人ではなくて勇猛の義がある。勇猛に菩提を求むるが故に菩提薩埵とよばれるのである。されば、菩提薩埵は又、開士、高士、大士等とも訳せられるが、普通は菩薩とよばれている。

仏の眞精神によつて、道を求め、仏陀にまで生活を成就せんとする人は、皆菩薩とよばれる。我等は実大乘の菩薩大士たらねばならない。而して、仏陀たり得ることに間違ひなく、菩薩道に精進する者、これを親鸞は正定聚不退転と呼んだのである。彼はこれを念仏道に発見成就した。念仏道に生きれば、阿彌陀仏の大願業力にひかれて不退転なることが出来、やがて無量壽の仏陀たり得ることに正しく定まる聚なるが故に、正定聚と言われるのである。而して親鸞は念仏行者をば菩薩の最高位五十一段の等正覺の位に住する者として価値づけた。

蓋し絶対にして絶対なる聖なる法身（法身を、真如、涅槃、一如等とよぶ）より来生して、一切衆生を救わんとする尽十方無碍光如来の全てを、信一念に領得し、真如法身の絶対価値を名号を通して全領するが故に、菩薩の最高位を証すると同一たることを得るのである。

我等は先に

衆生無辺誓願度 煩惱無尽誓願断 法門無尽誓願学 仏道無上誓願成

の四弘誓願を一鷹は我等の成就すべきものとして力説した。確かに我等はこれに深い関心を持たねばならない。然るに親鸞においては深い宗教的体験の世界において、これを法身にかえた。即ち真如界より現実人生に無限に願行を成就して一切衆生を救わんとする法蔵菩薩の上にそれを転じ、自らはその菩薩の本願を憶念することによって救われる大信に更生した。かくて四弘誓は仏の内具する徳とせられ、我等はその徳によって救われ、やがて他力の大用として四弘誓の精神に生きるのである。かくして正しい宗教的信仰は成就するのである。我等は教育精神の上に宗教をかさねばならない。而してその一途として、正しい信仰生活の内容を四弘誓願の上に立って考察したのである。（第十六巻第十一号）